

E.ウォートンと N.ホーソンの作品に表れる女性 —— 19世紀から20世紀に向かって

上 田 み どり*

ヨーロッパの貴族階級というものは、制度としてアメリカにはない。19世紀から20世紀にかけての「第二次産業革命」と呼ばれる変化の中、ビッグビジネスによる大富豪を生みつつあった、アメリカ社会には、大衆消費社会が登場しつつあった。富を得たことにおいて、ヨーロッパに似通った形として、ソースタイン・ヴェブレン (1857-1929) は、金ぴか時代のアメリカを評して、アメリカ固有の社会階層のカテゴリー「有閑階級」⁽¹⁾を名付けた。この場合、ヴェブレンのいう「制度」の意味は、「思考習慣的な考え方」、また「意識形態」のことである。それによると、「有閑階級」というのは、「名声をとまなう一定の職業が約束された」上流階級のことだが、それを「制度」=思考習慣という次元で言い換えるなら、人間の生活を維持するために不可欠な産業活動=勤労に従事せず、戦や政治や宗教といった誉れ高い職業に従事し、しかも豊かな生活をすごすような人々を上流階級に持つ社会システムである」と記述される。地位、価値、権威というものとの関連が重要となってくるが、作家イーディス・ウォートン (1862-1937) は、その中で、有閑階級という名のもとに、家系から家系へと受け継がれていったアメリカ型上流階級に属したと解釈できよう。その意味において、ナサニエル・ホーソン (1804-1864) は、中流階級に属するといえるであろう。幼少期からそれぞれ育った、異なる家庭環境や社会階層を背景に持ちながら、それでも、彼らそれぞれの作品の背後に流れる精神性は、ニューイングランドの風土に通底する特質を感じざるを得ない。

アメリカ建国期のピューリタンの倫理性を特質とする時期の、アメリカ社会と個人の間を描いたホーソンの19世紀の残滓を引き継ぎ、20世紀初頭、Henry James (1843-1916) を師と仰ぎ、イーディス・ウォートンは、次世代作家となった。⁽³⁾

E.ウォートンの作品は、ホーソンのあるいはジェームズ的なものを引き継ぎながら、表層に現れにくい社会の背後に潜む人間の情念をあぶりだそうとした。そ

* 広島経済大学経済学部教授

ここで、本拙論では、19世紀後半から20世紀の変わりゆくアメリカ社会と個人の関係を背景に、E.ウォートンの作品の中に、上記二名の先達の作家につながる、ニューイングランドの思考習慣とその特徴を探りたいと思う。そのためにまず、ホーソーとウォートンの作家の作品に表れる女性を、比較検討しながら進めて行きたいと思う。

1. ウォートン家の書庫

ウォートンとホーソーの幼少期における健康状態はよく似ている。元気でなかったために、二人とも読書することの楽しみ、満足感を味わっている。ホーソーは幼少期、足をいため約三年間戸外で遊ぶことをせず、屋内で読書にふけたという実話はみな知るどころである。ウォートンも幼少期は活発なアメリカ娘ではなく、当時のこのような富裕階級の家では家庭教師を雇っていた。家庭方針に従い、厳しい母親のもとに教育されたことも特徴的であると同時に、ウォートン自身、病気がちであったため、両親は学ばせることよりもむしろ健康を案じていたことが自伝にも記されている。⁽⁴⁾戸外で遊ぶことのできない間に古典を読んで過ごし、その文学的素養が、後の彼らの作品の滋養となったであろうし、ウォートンもホーソーも内向的思索的な青年期をすごしたと推測できる。ウォートンは、少女期、父親の書斎で過ごした思い出を自伝 *A Backward Glance* (1934) で語っている。

I have wandered far from my father's library. Though it had the leading share in my growth I have let myself be drawn from it by one scene after another of my parents' life in New York or on their travels. But the library calls me back, and I pause on its threshold, averting my eyes from the monstrous oak mantel supported on the heads of vizored knights, and looking past them at the rows of handsome bindings and familiar names. (BG p.64)⁽⁵⁾

上記のように、何度となくウォートンは父親の書斎を想起する。オールドニューヨーク時代の本質を示すのは、家庭内の蔵書であることを語る。ニューヨークにいるか、ヨーロッパに旅する両親の生活の場面を思い起こすも、思いは父親の書斎に引き戻される。ウォートンの祖父母の時代には、蔵書のある部屋を持つことこそが、その「家」の格や価値を示す重要な所有物で、“a gentleman's library”として存在していた。⁽⁶⁾また、その著書の中で、ニューヨークについて、ウォートンは、戸外は単調な通りで、心惹かれる建物もなく、ヨーロッパにあるような大聖堂もなく、歴史的な過去を物語る建物がなかったことを嘆いている。このことは、ホーソーが

かつてアメリカには、古城があるわけでもなく、想像力をかきたてるものが何もないことを嘆いたことを想起させる。ウォートンが1866年から6年間滞在したヨーロッパで見聞きした、ヨーロッパの深く重い歴史と文化の体験は、5歳から11歳の感受性の強い時期の彼女に圧倒的影響を与えたと考えられる。⁽⁷⁾

そのようなアメリカの時代の社会の景色・環境・外的要因をふまえ、まず19世紀のホーソーンが描く女性について述べたい。

2. ホーソーン の代表的女性像

ホーソーン の作品に登場する代表的女性主人公、*The Scarlet Letter* (1850) の、Hester Prynne、*The Blithedale Romance* (1852) の Zenobia、*The Marble Faun* (1860) の Miriam、また、短編‘Rappaccini’s Daughter’ (1844) の Beatrice には、それぞれ共通する典型的特徴として、古典的外見の属性である、ダーク（黒・暗・濃い色）なイメージが付与されている。そしてこれらの女性を取り巻く世界は、閉ざされた世界であり、その世界でそれぞれが、他の登場人物を圧倒せんばかりの生命力を持ち、作品のクライマックス場面を作りあげている。

ホーソーン の代表作、*The Scarlet Letter* の例を挙げてみよう。旧社会から新大陸に入植した情熱的女性の代表である Hester Prynne が、彼女のパートナーでもあり、ピューリタン社会の住民を指導する地位にある Dimmesdale 牧師に、次の発言で諭す場面である。

“...The future is yet full of trial and success. There is happiness to be enjoyed! There is good to be done! Exchange this false life of thine for a true one. Be, if thy spirit summon thee to such a mission, the teacher and apostle of the red men. Or,—as is more thy nature,—be a scholar and a sage among the wisest and the most renowned of the cultivated world. Preach! Write! Act! Do any thing, save to lie down make thyself another, and a high one, such as thou canst wear without fear or shame. ...that will leave thee powerless even to repent! Up, and away!” ⁽⁸⁾ (SL p.198)

上記の言葉は Hester Prynne の最も力強い情念の塊から発した大胆な言葉である。ただ大胆というだけには留まらない、反社会的とさえ思われるかもしれない場にあつて、有象無象の一個の人間ではない彼女の存在を示すものである。そのような彼女の説得を持ってしても、牧師 Dimmesdale はその閉ざされた社会からは逃れようとはしないし、ピューリタン社会以外の世界での存在意義が考えられない。従

って、牧師自ら行動を取るはずもない。死を持ってのみ逃れることになる。また、この大胆な勇気ある発言をした女性主人公 Hester Prynne の作品の最後の行動を追ってみると、娘 Pearl のいる海の向こうの広い世界、つまりヨーロッパに一度は行く。これはかつて旧世界とアメリカ人が忌み嫌って逃げ延びた世界ではあったのにも関わらずである。しかし作家ホーソーンは彼女を再びニューイングランドの地に戻すのである。これが反社会的行動を起こした強い Hester の精神性の特徴を示していて、ホーソーンの描く女性の精神性のひとつの提示だと思われる。つまり、社会の掟に背いたたものは、その社会から去らねばならないことをホーソーンは容認するが、ニューイングランドに帰るといふ行動でもって、彼女の責任の取り方を暗示している。

また、短編'Rappaccini's Daughter'の Beatrice のように、温室花壇という一定の場所においてのみ語られる。毒性を持った女性の意味するものは、すでに反社会的で、見慣れた現実の背後に「不思議さ」をあるいは、「神秘性」といった、ホーソン独特のロマンスに必然的な暗示を潜ませている。植物(花)が女性(Beatrice)のセクシュアリティと結び付けられているのは、19世紀においてはすでにステレオタイプ化していると述べている論文もある。⁽⁹⁾ 前述の *The Scarlet Letter* の女性主人公 Hester が娘 Pearl を抱いて登場するのは、薔薇(花)の茂みに囲まれた牢獄からであるのも一例を示唆している。

話はまた'Rappaccini's Daughter'に戻して考えてみたい。科学者ラパティーニ博士の娘 Beatrice の世界は、この物語の舞台であるイタリアの植物学者の庭という設定の中で起こる。彼女の生命力はセクシュアリティと結び合っていて、結局その狭い世界では収まりきらないあふれんばかりの灰汁(アク)の強さを示す。その結末は死である。

このことは、当時の現実社会において、大胆奇異とみえたり、反社会的、むしろ官能的生命力溢れる彼女たちにあって、背後に潜む「原罪」や「先天的墮落」から人間は逃れられないとホーソーンは見抜いてもいて、真実を語ろうとするその世界は陰気で邪悪に満ちていると暗示してもいる。

ホーソーンは1840年代にエマソン (Ralph Waldo Emerson [1803-82]), ソロー (Henry David Thoreau [1817-62]), フラー (Margaret Fuller [1810-50]) といった代表的な超越主義者と交際しており、その時代の鋳型に人間の心が流されているのではないかといった疑念をも持つように思われる。しかし彼らは、意識内に宿る神を信じて疑わない。従って、負の方向に向かう運命も、ある程度人間の善の力で調整できると信じているわけで、社会の既成概念を自己の規範とするのではなく、

個人の思考に求める⁽¹⁰⁾。このことは、Hester が自分の行為の基準を、実際には、自分とディムズデールの関係にしか求めなかったこととも一致している。この行為は、自分の本質に合っているものだけに従おうとする自己本位で身勝手なものにも成りえるのだが、人間は機械部品のように、取り替えがきかない貴重な存在であるとする、人間性重視の姿勢も伺われる。

精神的混乱を表わすとされる、森におもむいた Hester の心情を吐露する言葉にも表わされる。

The stigma gone, Hester heaved a long, deep sigh, in which the burden of shame and anguish departed from her spirit. O exquisite relief! She had not known the weight, until she felt the freedom! By another impulse, she took off the formal cap.... There played around smile, that seemed gushing from the very heart of womanhood... All at once, as with a sudden smile of heaven, forth burst the sunshine, pouring a very flood into the obscure forest, gladdening each green leaf, transmuting the yellow fallen ones to gold, and gleaming adown the gray trunks of the solemn trees. The objects that had made a shadow hitherto, embodied the brightness now... Such was the sympathy of Nature—that wild, heathen Nature of the forest, never subjugated by human law, nor illumined by higher truth.... (SL pp.202-203)⁽¹¹⁾

上記の描写からは、Hester の心にピューリタンの示す神ではなく、自然という神、あるいは自然が一体となった霊に似た存在が、彼女を見ている、あるいは見守られているといったような感覚を提示する。彼女が一時的に、解き放たれる場面である。自然の中では人間本来の善や人間性豊かな姿に帰れることを上記の節は示しており、その点においてホーソーンはエマーソンの影響を受けていることは窺える。しかしながら、作品の舞台設定である17世紀は、アメリカ・ルネッサンスの担い手となる超越主義に窺えるロマンス的な要素を反映するヒロインの異質性が強調され、ロマン主義の楽観主義的歴史観や極端な個人主義とは相容れない要素が描かれているように思われる。

また、ホーソーン作品においては、作品の中で女性の登場人物のバランスを保つように、上記人物とは対岸に位置するような女性たちの配置も見逃せない。*The Blithedale Romance* (1852) の作品中、女性主人公として考えられる美しく官能的で、誇り高い女権論者ゼノビアは入水自殺という結末になっているが、彼女に対応して、病弱で従順なお針子 Priscilla は「ウェールの婦人」として、また巫女役とし

でも務める。しかしこれら二人の女性は実は腹違いの姉妹であったことも明かされる。この反社会的な女性主人公と拮抗する存在、そしてある意味天使的存在の女性を相対して登場させることは、様々な環境条件に絡めとられた「解けがたい結び目」⁽¹²⁾を持つ人間の現実を避けるわけにはいかないとした作家ホーソーンの視点を表わす。

そしてまた、ホーソーンが、イギリスの領事職を済ませ、イタリア、ローマとフィレンツェに滞在しヨーロッパの魅力と混沌を綯い交ぜにしたした *The Marble Faun* (1860) のようにミリアムとヒルダという二項対立的女性の登場がある。それまでのニューイングランド世界とはおよそちがった衝撃的心の揺らぎを秘めているように思う。ここでもホーソーン独自の neutral territory (中間地帯) を歴史・伝統の詰まっているローマに、詩的で幻想的な空間を持つ混沌とした舞台領域として選んだのである。⁽¹³⁾

3. ウォートンのニューヨーク社会の女性

イーディス・ウォートンは、英国・オランダ系の実業家貴族の出身である。激動するアメリカ資本主義経済勃興の、時代兆候が見え隠れする。そうした変化の激しい経済環境の中でのウォートンが作品に描く女性主人公が生きる、社会と個人の関係は、きわめて厳しい。社会的に落ちぶれてゆく過程を描くものが多い。しかしそのような苦境にあつて、自らの暮らし向きが左右されるにしても、ピューリタンの倫理性を基盤とした、ニューイングランド的精神性を示す。それは、醜悪なものを嫌い、不快なものに背を向けず一端立ち向かおうと努力する、高い倫理性を持つものである。

例えば、*The Age of Innocence* (1920) の中で、女性主人公、Ellen Olenska に、彼女を恋慕してかなわない Newland Archer とその誠実な妻、May Welland を配して安っぽい恋愛小説になっていないのは、倫理的高潔性が守られることである。彼らの間で、上流社会の約束事は守られ、悲劇の主人公にされそうである Ellen Olenska は、彼女を取り巻く Newland Archer とその妻 May Welland の三角関係の中で、誰一人倫理的破滅に陥ることはない。作品中、Newland と Ellen が会い、話あう場面で、Ellen が次のように言う。

You had felt the world outside tugging at one with all its golden hands—and yet you hated the things it asks of one; you hated happiness bought by disloyalty and cruelty and indifference. That was what I'd never known before—and it's better than anything I've known. (p.172 AI)⁽¹²⁾

Ellen が言う不誠実や欺瞞、残酷さや無関心といったものは、作家ウォートン自身

が嫌うヨーロッパ貴族社会での思考習慣、当然の価値判断であって、そのことで得られる幸せは Ellen の欲するものではないし、Newland も同じ価値判断を下すはずだった。それまでに Ellen は、ニューヨーク上流社会から彼女が忌むべき存在として、避けられていたことに気づいたことを Newland に話す。それは Ellen が彼女の信条に反しない価値判断のままに行動するからであり、彼女が属するソサエティの枠からはみだしているからである。

前述したホーソンの描いたピューリタン社会で、Hester Prynne が、ヨーロッパに一時期出ては行ったが、再び責任を取るべき場所、アメリカに返されるのと同様、Ellen は一時期ニューヨークの社交界という閉じられた社会に入り、受け入れられないで、再びヨーロッパに Ellen を帰還させ、後に Newland にその場所を訪れさせ、その行動の結論の意味を作者自ら語ることがをせず、読者に明け渡している。エレンにとって、愛着と批判の二律背反したニューヨークは、好奇心を掻き立てる場所であっても、常に醜聞や不愉快な事柄を隠し、外面を取り繕う排他的な世界でしかない。限られた範囲、閉ざされた社会を舞台として提供されながらも、エレンの責任を取る場所をヨーロッパとしたのは、歴史と伝統を重んじる作者の共感する場所を提示するためであろう。

また、*The House of Mirth* (1905) において、主人公 Lily Bart は、実務能力を持たない生活者である。現代的解釈でいえば、働くことを知らない、経済的自立のできない女性と考えられるが、初めから働いて生活の糧を稼ぐという方法を選択枝に持たない女性である。金銭よりも自己犠牲、忍従、社会秩序といった中に、矜持と高潔性を忘れない。この個人と社会の関係が Lily Bart という女性主人公の思考習慣の基盤となっているように思われる。最後に経済的困窮に落ち込んで死を選ぶほか仕方のない状況になるわけだが、敬愛していた相手である従兄、Selden は、その場面に至って、究極の真実を知ることになる。

Then, gradually, his troubled vision cleared, old hints and rumours came back to him, and out of the very insinuations he had feared to probe, he constructed an explanation of the mystery. It was true, then, that she had taken money from Trenor: but true also, as the contents of the little desk declared, that the obligation had been intolerable to her, and that at the first opportunity she had freed herself from it, though the act left her face to face with bare unmitigated poverty. (H.M. ⁽¹³⁾ p.255)

上記の通り、アメリカ社会が大量生産の時代に突入する前の、経済活動とまるで縁のない、汚れを知らぬ、Lily という清らかな名前のごとく、非生産性の象徴であ

る主人公は、借りた金をいくら貧困にあっても返し続け、道徳的に高い位置はくずさなかった。その生活臭のない高貴な精神性は、良き時代のニューヨーク社交界の薄っぺらな新興成金社会にいた人間と縁を切ることを決意させ、自ら死を選んでしまうことになる。

4. ウォートンのニューイングランド

ウォートンの作品の中でも庶民を描き、異質な独自性を著しているのが、*Ethan Frome* (1911)⁽¹⁶⁾ と、*Summer* (1917)⁽¹⁷⁾ である。ウォートンは、ニューヨーク州の北部とマサチューセッツ州北西に接する場所に位置し、ボストン市内からバスで約4時間ほどかかる山間部に入ったレノックスの、見捨てられた貧しい村の中で、夏の別荘を持った。彼女はその場所が気に入っていたが、夫は寒さが気に入らず結局長くそこに住むことはできない。しかし、この閉鎖的環境にあることが、ウォートンにひとつの傑作を描かせる材料を与えたことになる。ウォートン作品の中の二種類の内の、一つの分類に属する作品 *Ethan Frome* についてまず述べたい。

この作品の主題は、「個人と社会の関係における葛藤」であるが、めずらしく特徴的なのは、レノックスにウォートンが滞在中に見聞きした、貧しい寒村で材木店を営む青年を取り囲む女性たちとそのコミュニティが描かれる悲劇である。主人公は Ethan だが、ある時期、母親の看病に入った Zeena という七歳年上の女性と、母親の死後結婚する。余談であるが、この Zeena という名前はホーソーンの作品の Zenobia の通称であることも想起させる。この Zeena に憂鬱症の持病が出て、その為、若いところの Mattie を家事一切手伝わせるために連れて来る。Ethan には、それまでその土地 Starkfield の村を出たいと思う気持ちが以前からあったが、それが契機となり、その気持ちは益々加速する。

もともと Ethan という名は、旧約聖書の中、ヘブライ語で、力強さ、堅実、耐久性、永続性を意味する。貧しい村の中で孤独に「耐える」ということの辛さが、彼の特質の中でも強調されていると解釈できる。

村を出ようとして失敗した証である、‘足をひきずる’ Ethan の姿は、彼の現状説明を求められることにもなる。ここでの Zeena は外見上も、暗い New England の環境を象徴する人物である。灰色の顔面に頬骨は高く、愚痴を言う以外は無口である。Ethan にとって、彼女の沈黙を意味するものが、潜在的恐怖を与える負のイメージで印象的である。一方 Mattie は対照的に若く明るく健康的ではあるが、Ethan にとって、幻想でしかない。Mattie が家に返されると決まり、その直前、自殺的行為の二人で乗ったそりが、大木にぶつかり、二人は障害者になってしまう。その介護を

するのが、皮肉にも、再び妻の Zeena なのである。結局 Ethan は、妻 Zeena の支配を一生逃れられない。

Ethan のロマンチックな夢は幻想に終わり、現実を変えることはできない。若くかわいく健康的であった Mattie は、今や小さな苦しみ呻く生き物となり、死に至るまでの長い間 Ethan と Mattie は二人が抱える捻じ曲げられた醜い現実には耐えなければならない。この二人の世話と家事一切を一生引き受けることになる介護者 Zeena も、逃げ場がなく、無口なまま、耐えながら責任を果たすことになる。三人が人生の敗北者としても読めるかもしれないが、このような悲劇的結末を迎えることが、当事者の行為に高潔な倫理感を持たせているからにはほかならないようにも思われる。しかしながら、主人公を Ethan と考えないで、Zeena を女性主人公とみなせば、艱難辛苦を乗り越え三角関係の頂点に立ち、最終的に彼女の勝利という結末と考えることもできる。⁽¹⁸⁾

根雪の寒さ、冷たく輝く星、季節の移り変わりに伴う光と闇といった、日常の自然に密着したニューイングランドの田舎の村に住む人たちの、物静かで明け透けにものを言わない、沈黙の閉ざされた狭い村で、時にはグロテスクと思われるほど残酷で、言葉にならない雰囲気があり、生きる苦悩と忍従に徹している貧困村を観察しながら、ウォートンはこれらを、ニューイングランドの特徴的人生模様の断片として提示しているのではないだろうか。

Ethan Frome で、ニューイングランドの農村生活の暗い面を描いたのに対して、その後、ウォートンは中編 *Summer* を出した。ここでは、ニューイングランドとニューポートの上流社会を痛烈に皮肉っていて、地元では出版当初不評だったことを次の様に自伝で著わしている。

Needless to say, when “Summer” appeared, this chapter was received with indignant deniaial by many reviewers and readers; and not the least vociferous were the New Englanders who had for years sought the reflection of local life in the rose-and-lavender pages of their favourite authoresses-and had forgotten to look into Hawthorne’s. (BG p.294)⁽¹⁹⁾

上記の一文は、当時のニューイングランドびいきの女性作家たちの描写とウォートンのそれとは異なり、地域の生活を赤裸々に映し出したことが、ニューイングランドの読者や多くの批評家から非難を受けたことを物語っている。ウォートンとしては、女性誌で稼ぐ女性作家たちによる甘い描写を批判しながら、ホーソーンのほうが、自分よりもっと手酷くニューイングランド気質の偽善性、残酷さ、腐敗を突いていると、わざわざホーソーンの名を出して、逆襲しているようにみえる。また、

そのように、ウォートンが、ホーソーという作家を意識しているということも伺えるのである。

North Domer の田舎から養子となって、弁護士のうちにもらわれてゆく、女性主人公、チャリティ・ロイヤルは、無力な庶民であり、*Ethan Frome* と同様の題材を通して語る。チャリティは、前述のマティーと同様孤児であるが、チャリティには自由が与えられる選択肢があるという点において、ウォートンの描く女性の中では新しいタイプである。養父ロイヤルに近親相姦されながらもそれを逆手にとり、チャリティはむしろ優位に立っている。若い訪問者ハーニーに心惹かれ、彼の子も宿すが、‘山’に居るはずの母親のもとに帰る。そこで母の死という現実を超え、自らも母となるべく、ロイヤルの元に帰ることになる。主体的に生きる過程での必然は、彼女の経済的自立と精神的自立であるが、*Ethan Frome* の Mattie 同様、経済的自立は彼女にとって不可能であり、ウォートンはその選択肢を女性主人公に与えてはいない。

結び

ウォートンと同時代の作家で、同じくヘンリー・ジェームズを師と仰いだアメリカ女性作家に、Willa Cather (1873-1947) という作家がいる。彼女は、Virginia 州というアメリカ最古の土地に生まれ育った。そのことが一因とも考えられるように、キャザーの女性描写は、ニューイングランドの特質とは異なり、アメリカの西部魂を持ち、雄々しく生きる女性が描かれる。彼女自身ジャーナリストとして10年間、仕事や休暇でヨーロッパやニューヨークに出てはいるが、ウォートンと関心を別にしている。このことは、ウォートンがニューイングランドに生まれ育ったその地域性と、家庭・社会環境を含む階級が大いに思考習慣に影響を与えていることを示すものではないかと思う。

これまでホーソーの描く女性像とウォートンの描く女性像の比較を試みたのであるが、基本に高い倫理観を備えた精神性を貫く、ニューイングランドのピューリタン的特質は、時代の変遷を経て、また、社会とのかかわりを通して、複雑に伸びていったように思われる。過去、ローレンス・ビュエル氏が、ホーソーは二つのテーマを軸としていることを挙げている。「一つには、社会や国家に対する個人の権利で、もう一つは、個人に対する社会の規律」だと言う。ホーソー作品では、個人と社会の関係は、伝統的ピューリタニズムの神への荘厳な畏敬の念と人間的な信頼を併存させ、読者にその二つの均衡による緊張感を与えた。また、ウォートンは、自分の住んだ社会階層の規範にあって、保守的といえるほどの、社会秩序の均衡を

保つ中、どこまでも女性主人公たちに、倫理的高潔性を保たせ、そこにニューイングランドの思考習慣を特徴づけたように思われる。

ホーソーンが生きた19世紀からウォートンの20世紀へと時代は少しずつ変容し、社会と個人の意識変化も確実に進んでいった。その後を引き継いだウォートンという女性作家の鋭く先を見据える鑑識眼は、時代の変容にへつらうことなく、アメリカ型資本主義社会の羽ばたきの裏に潜む隠された不思議を見つけ出し、その真実を映し出すあらゆる表現を試みようとしたことは確かである。

注

- (1) ソースタイン・ヴェブレン、『有閑階級の理論』による。筑摩書房、1998.
- (2) Ibid., p.448.上記 訳者である高哲男氏の解説を参照。
- (3) James はいわゆる近代心理主義リアリズムの生みの親であり、小説技法の格新により、20世紀小説の基礎を築いた作家とされる。ウォートンとは、1903年頃から交際始まる。James は彼女の行動力に驚嘆し、自分の生活がそれに巻き込まれることへの狼狽を見せている。しかし古いアメリカの価値観を共有する同志として、ユーモアや皮肉を分かち合う人間的つながりで、結ばれていたと考えられる。彼らの交際は、1916年に James が没するまで続けられた。p.28『イーディス・ウォートンの世界』鷹書房弓プレス、別府恵子編著
 なお、James のウォーオンへの忠告は、あくまで自分自身のもの、すなわちアメリカの主題を追うべきだということである。
- (4) Edith Wharton, *A Backward Glance* (New York Charles Scribner's Sons 1964) p.4.を使用。以後ウォートンの自叙伝からの引用はすべてこの版からであり、引用に続けて、括弧内に BG とタイトルを示し、ページ数を示す。
- (5) Ibid.p.64
- (6) Ibid.p.52
- (7) ウォートンの実家であるジョーンズ家は、冬は New.York., 夏は Newport の家で過ごした。1866年から1872年はヨーロッパに滞在。
- (8) *The Scarlet Letter* のテキスト は、The Centenary Edition of the Works of Nathaniel HawthorneI (Ohio: Ohio State University Press. 1964)を使用した。『緋文字』からの引用はすべてこの版からであり、引用に続けて括弧内にページ数を示す。
- (9) 『英語青年』Vol. CXL 1-No.10, 1996年1月号, (研究社) p.5武田悠一氏の発言による。
- (10) “Self Reliance” in Emerson: Essays & Lectures. The Library of America (New York Literary Classics of the United States, Inc., 1983), p.266.
- (11) Ibid., pp.202-203.
- (12) ‘inextricable knot’として『緋文字』にも12章に描写がある。
- (13) 丹羽隆昭,『恐怖の自画像 ホーソーンと「許されざる罪」』(英宝社, 2000)p.241
- (14) *The Age of Innocence The Complete Works of Edith Wharton*, (Kyoto RINSEN

Book Co. 1988) p.172. 『無垢の時代』

- (15) *The House of Mirth*, Norton Critical Edition (W.W.Norton& Company, Inc. 1990) p.255 『歓楽の館』
- (16) 渡辺和子氏は、『イーディスウォートンの世界』の中で、この物語をセクシュアリティ・欲望・物語としてテーマを絞っており、ジェンダーの視点から、アメリカ社会の近代化、都市化、消費文化の普及などによる、家族、性、結婚に対する意識の変容を指摘している。pp.99-123
- (17) *ibid.* pp.110-123
- (18) 『イーディスウォートンの世界』の中で、渡辺和子氏は、イーサンとマティーのセンチメンタル・ラブの物語の裏の物語として、病と闘い、勝利する女の物語が浮上すると述べている。p.107
- (19) BG. p.294